

令和 6 年 5 月 29 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01791

研究課題名(和文)20世紀ドイツ鉄道業の多地域・多国間比較的研究：システムの収束・統合を中心に

研究課題名(英文)A comparative research of German railways in the 20th century

研究代表者

ばん澤 歩 (Banzawa, Ayumu)

大阪大学・大学院経済学研究科・教授

研究者番号：90238238

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀ドイツの鉄道業の経営システムを、異なる地域・国の鉄道業間の関係や技術ならびに組織的構成要素の移転を軸に観察分析した。複数邦有鉄道間の主体的交渉・統合過程、外国(中東・欧・西欧、ならびに日本など東アジア)鉄道業と統一ドイツ国鉄・ライヒスバーンとの関係性という視点から観察・分析した。この結果、(1)一国レベルでの「ドイツ」鉄道の統合は必ずしも必然的・合理的なものではない(2)統合されたライヒスバーンと東アジア鉄道業への関心は非対称的であったことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

・第一次大戦前にドイツ語圏に複数存在した独立した邦有鉄道には必ずしも一考レベルの鉄道組織としての統合の合理性がないという検証結果を得ているが、ここからは国民経済単位での独占的な組織統合には非合理が生じる可能性が示され、経済史研究における「地域」の重要性が示唆される。また、民営化にあたって一国レベルでの独占企業を選択したドイツ鉄道とJRなどとの比較において含意が少なくない。
・日本の鉄道業(日本帝国圏鉄道)と欧州とりわけドイツの鉄道業との間の関心の著しい非対称を明らかにしたことで、技術水準に見られる戦前期日本経済の位置づけを再確認するとともに、国際関係のありかたへの示唆が得られる。

研究成果の概要(英文)：The management system of the railway industry in 20th century Germany was observed and analyzed with a focus on the transfer of relationships, technologies, and organizational components among railway industries in different regions and countries. The study observed and analyzed the process of active negotiation and integration among multiple state-owned railways, as well as the relationship between foreign railway industries (such as those in the Middle East, Eastern and Western Europe, and Japan) and the unified German National Railway (Reichsbahn). As a result, it was found that (1) the integration of the "German" railway at the national level was not necessarily inevitable or rational, and (2) the interest in the integrated Reichsbahn and the railway industry in East Asia was asymmetrical.

研究分野：経済史

キーワード：経済史 ドイツ史 鉄道史 帝国史

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

- (1) 研究担当者は19世紀ドイツ語圏における鉄道業の発展が工業化にあたえた影響を、多方面から検討してきた。それらは数量経済史的な分析手法ならびに制度・組織史的な実証的観察によるものであり、一連の成果は、鳩澤歩『ドイツ工業化における鉄道業』(2006)としてまとめている。
- (2) ここで工業化前期・盛期の鉄道業の展開を扱ったことで、交通インフラの発達と「国民経済」成立との関連について、観察分析対象とすべき時期ならびに地理的範囲の拡張の必要が生じた。
- (3) 前者については第一次大戦後のドイツ・ライヒ(「ヴァイマル共和国」「ナチス・ドイツ」)に観察対象を拡張した。その結果、『鉄道人とナチス ドイツ国鉄総裁ユリウス・ドルブミュラーの二十世紀』(国書刊行会 2018)を得たところ、ナチス・ドイツ期経済史一般についての研究をこの方面からも進展させる必要に気づくことになった。
- (4) 後者については、一ドイツ国民国家の規模に限らず、研究対象を地理的に拡大し、東アジアに対するドイツ経済の進出を鉄道業についてもより実証的な密度を高めて考察する必要が高まった。ここで近年高まっている日本帝国圏鉄道史研究との接点が生じた。
- (5) さらに新古典派的市場観に限られない現代経済学的手法の援用によって、組織としてのドイツ鉄道業の展開について、議論の暗黙の前提とされてきた「統合＝ライヒスバーンの必然性」について再考察を行う余地が大きいことがわかった。

2. 研究の目的

20世紀ドイツ鉄道史の展開に「地域」「グローバル化」「組織・制度・体制」の3つの視角からアプローチする。本研究では20世紀ドイツの鉄道業をその変遷に応じて4期(第一次大戦前の邦有鉄道並立期、20年代～第二次大戦時のドイツ・ライヒスバーン期、第二次大戦後・冷戦時代の東西国鉄分裂期、ポスト冷戦後の再統一・ドイツ鉄道会社期)に分け、それぞれについて複数地域間ならびに対外関係を軸に制度・組織や経済的機能を多様な視角から評価する。これにより、20世紀世界経済における鉄道という交通・流通セクターの置かれた世界的に共通の問題と地域や国民経済に特有の問題とを区別して取り出し、グローバル化下の世界経済における他地域の鉄道業との関係性を実証的に観察する。そこから、組織・システムの統合や収束にみられる史的パターンを見出すのを、研究の目標としている。

3. 研究の方法

本研究では20世紀ドイツの鉄道業をその変遷局面について、それぞれ複数邦有鉄道間の主体的交渉過程、外国(中東欧・西欧、ならびに日本など東アジア)鉄道業と統一ドイツ国鉄・ライヒスバーンとの関係性、占領下ならびに東西分裂時代の東西国鉄の比較・相互交渉という視点から、分析を行った。

観察・分析に際し主に使用したのは、ドイツ鉄道業に関してはベルリン、ミュンヘンなど各地公文書館(連邦公文書館ベルリン・リヒターフェルデ分館、プロイセン枢密公文書館(ベルリン・ダーレム)、バイエルン州立文書館)に所蔵されている邦有鉄道および国鉄(ライヒスバーン、旧西独国鉄、旧東独国鉄)関連の内部資料(ライヒ交通省、プロイセン交通省、プロイセン内局、バイエルン交通省、……等の公文書史料)であった。これらについてはCOVID19感染症拡大による制限があったが、制限解除後は円滑な利用ができた。日本鉄道業とドイツ鉄道業の関連については上記に加え、アジア歴史研究センターを通じて得られる旧鉄道省・外務省関連公文書や、米国連邦公文書館に所蔵される旧在独日本帝国大使館所蔵文書、さらに北海道大学所蔵北方文書のうち満鉄関連資料を利用し、旧鉄道省ならびに旧南満州鉄道株式会社(満鉄)ベルリン駐在事務所関連の史料を探索した。

これらの史料の観察分析により、「鉄道国有化」をめぐるバイエルンなどの邦有鉄道などの独立志向の主張とその経営状況との関連性を改めて探ることを通じ、国有化論と鉄道組織の経営状況や組織(人事)問題との対応関係を精査できた。この点に関しては、現代の経営分析の簡単なツールを世紀転換期当時のバイエルン、プロイセンはじめ邦有鉄道の経営状況(経営指標の数値)に当てはめて分析することにより、ライヒ一元化反対論にみられる合理性の再検定をおこない、「鉄道国有化」の必然性・合理性を再評価し、第一次大戦後の政治状況・社会状況を離れて後年の「ライヒスバーン」に近似した経営統合を行い「ドイツ国鉄」を編成することは経済的合理性を欠いていたことを確認した。

また、ドイツ鉄道業と日本帝国圏鉄道との関係については旧鉄道省ベルリン駐在事務所そのものの機能やその人員についての確定を目指す調査からはじまり、本省や関連省庁に送られた言説とその影響を日本鉄道史の文脈にも照らして確認し、あわせて、ドイツ側からの日本鉄道業ならびに東アジア鉄道業への意識の変遷を外交文書等で確認した。とくに中国大陸に関する日独外交関係は、ドイツ側の体制や施策の変化により比較的短期間に変遷したが、それが日本なら

びに東アジア帝国領域のハード面の技術移転やソフト面の組織運営技術（たとえば会計システム）などの移動に与えた影響は軽微であり、日本帝国圏鉄道業は鉄道省 日本国鉄も満鉄もともにドイツの鉄道業に継続的に多面的な関心を向け続けたことを確認した。技術的に（とくに電気機械関連で大きく）遅れをとっていた日本側とドイツ側とでは、互いに向ける関心に質的量的に差があった。こうした戦前の日独関係の意識面での非対称性はすでに研究史上の定説であるが、鉄道業についても原史料にもとづきこれを確認できた。その成果の一部は、日本ならびに旧日本帝国圏の鉄道業について組織・人員に焦点を当てて研究を進めている帝国圏鉄道史研究会や、台湾・台北大学での研究会において発表し、議論することができた。

本研究は 20 世紀ドイツ鉄道史研究としての側面を持つため、鉄道の運営システムについて 20 世紀における展開を 3 つの著作によって通史的に追うことができた。19 世紀以来現代にいたるドイツ鉄道業の通史において一般的な概観を行ったうえで、ここでの認識をふまえてナチス期、第二次大戦後から 90 年代に至るまでの冷戦期・東西ドイツ分断記について、公文書館等の原史料にもとづく観察と叙述をおこない、制度史的な座標をたてたといえる。

前者ではナチ期経済史研究にみられる問題を指摘し、今後のこの方面での出発点となる議論をおこなった。後者では、出自が同じ両独国鉄組織が異なる経済体制・環境のなかでどのように分岐していったかを組織史として追うとともに、とくに両独国鉄の接点となる西ベルリン・Sバーン(市内電車)の経営について分析を加えた。冷戦期、旧東独所有・経営体でありながら西ベルリンでも運行されていた Sバーンの運営の実態を人事面もふくめてあきらかにし、体制論 やシステム論として進められてきた旧東独経済研究に実証面で寄与するケース・スタディの一つとなるとともに、戦後経済史・経営史の新たな視角としての東西交渉や、特殊な連続性をもつ地域(都市)経営史としての視角も得たとできよう。

以上により、とくに経済史・経営史の視角から 20 世紀ドイツ鉄道史の包括的な把握を新たな研究視角に即して得られたとできる。

4. 研究成果

- (1) 一般的な叙述を含む通史的な『鉄道のドイツ史』(中公新書 2020)と『ナチスと鉄道』(NHK 出版新書 2022)を著すことで、19 世紀以来のドイツの鉄道業の産業部門としての発展に通観を得た。これにより、1830 年代以来のドイツ連邦の諸邦・地域分立のなかでの鉄道業の展開とドイツ帝国成立後のそれとの強い連続性と、第一次世界大戦という転換点をはさんだ 20 世紀前半のドイツ鉄道業(Reichsbahn)との間の、単に経営規模の拡張に留まらない組織原理・経営パフォーマンスにみられる非連続性・断絶を認識することができた。具体的には、ほぼ政治的理念によって制度化された「ドイツ国鉄」は、まさに「ドイツ鉄道の父」F・リストの悲願の実現ともとらえられがちであった(し、いまもそうされがちである)が、個々の鉄道路線の地域経済における経営合理性を無視する形で成立したものであり、たとえばバイエルン国鉄などによる執拗な抵抗・反対には一定の根拠があったといえる。ここに Reichsbahn 成立の意義を再検討する必要が浮かび上がるが、これをよりフォーマルな形で実証するべく、経営合理性の分析を試みる見通しが立った。こうした個別研究の背景となる認識を得るために、20 世紀前半経済史の焦点であるナチ経済史研究の動向を確認し、流通・交通面での分析に間隙と可能性が高いことを確認している。
- (2) 『ふたつのドイツ国鉄』(NTT 出版 2021)によって、第二次世界大戦後東西ドイツ比較鉄道史という新しい領域が開かれたといえよう。とくに東ドイツ(ドイツ民主共和国)史研究においては経済的衰退が体制転換(Wende)を招いたという共通理解があり、優れた実証的な経済史研究が積み重ねられていたが、それらは生産システムの分析にやや傾斜しており、流通の最も主要な担い手で(西ドイツ(ドイツ連邦共和国)と異なり)あり続けた東ドイツ国鉄については、実証的分析に不足がなかったとはいえない。情景書籍に集約された研究では未公開の文書館史料を活用し、東ドイツ国鉄内部資料によって職員・労働者の個人データに及ぶ事例分析を実施した。これにより、東ドイツ国鉄の組織運営におけるインセンティブ・スキームの不備という東ドイツ経済全体に通じる問題をここでも再確認すると同時に、怠業や虚偽申告など意図的な低生産性を東ドイツ国鉄の労働環境で共謀することの一種の合理性も見出すことができた。これらは東ドイツ経済史研究の最新の理論的アプローチに実証的根拠を与えられるものである。
- (3) 日本鉄道業・帝国圏鉄道業とドイツ鉄道業との同時代的な関係性を双方向の史料から実証的に検討し、以下の点を論証した。日本側からドイツ鉄道業に対する強い関心は、技術面に留まらず多方面について 19 - 20 世紀前半を通じて継続した。鉄道業の国際会議における日本帝国圏鉄道の存在感は比較的低く、これは欧米との地理的遠隔による路線連絡の不足とあわせて、当時の欧米鉄道業の主要関心事である電化について日本鉄道業が追随できない状況にあるなど、技術的問題関心への差異が大きかったためでもある。南満州鉄道(満鉄)については地理的条件から欧州鉄道との連結可能性や中国市場における外国鉄道業との競合関係や本国経済との交易への直接関与がある点で日本本土の鉄道(国鉄)との違いがあるが、国際会議や職員の駐在・留学、研究などの対ド

イツ関係において日本国鉄との大きな違いを見出すことはできない。満鉄はあくまで日本帝国圏鉄道の一部として機能していたといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 ばん澤 歩 | 4. 巻 73巻3号 |
| 2. 論文標題 書評『林采成 (Lim Chaisung) 著『東アジアの中の満鉄 鉄道帝国のフロンティア』 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 経済研究（一橋大学経済研究所） | 6. 最初と最後の頁 281-283 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 ばん澤 歩 | 4. 巻 40巻 |
| 2. 論文標題 コメント2 日独比較の視点で：ナチス・ドイツ期鉄道輸送との対比で | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 鉄道史学 | 6. 最初と最後の頁 46-47 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 2件／うち国際学会 2件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 ばん澤 歩 |
| 2. 発表標題 戦前・戦中期日本鉄道職員の「ドイツ認識」と「ドイツ経験」 |
| 3. 学会等名 社会経済史学会 第92回全国大会（九州大学） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 ばん澤 歩 |
| 2. 発表標題 近現代ポーランド経済における「連続」と「断絶」 ダイナミックなシステム変化の中での政府／国民・民族／企業 への コメント； 「ドイツ」経営史の観点から |
| 3. 学会等名 経営史学会 関西部会大会（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Ayumu Banzawa |
| 2. 発表標題 “ Was a ‘ Reichsbahn ’ before the First World War necessary? : A reassessment of railway integration and nationalization ” (with T. Hidaka) |
| 3. 学会等名 東京大学経済史研究会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Ayumu Banzawa and Takuro Hidaka |
| 2. 発表標題 “ Was a ‘ Reichsbahn ’ before the First World War necessary? : A reassessment of railway integration and nationalization ” "Research Meeting of Economic History At Graduate School of Economics, Osaka University "大阪大学 |
| 3. 学会等名 Research Meeting of Economic History At Graduate School of Economics, Osaka University (国際学会) |
| 4. 発表年 2024年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 ばん澤 歩 |
| 2. 発表標題 1920 - 30年代の満鉄とドイツ 日本帝国圏鉄道の国際関係を考察するために |
| 3. 学会等名 第11回帝国鉄道史研究会 |
| 4. 発表年 2024年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 ばん澤 歩 |
| 2. 発表標題 戦前・戦中期在独 (ベルリン) 日本人鉄道職員: 「ドイツ 経験」は何をもたらしたか |
| 3. 学会等名 国際学術検討会 (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 ばん澤 歩 |
| 2. 発表標題 満鉄とドイツ - 1930年代を中心に：欧州事務所、国際会議、「大豆経済」 |
| 3. 学会等名 第8回帝国鉄道史研究会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 ばん澤 歩 |
| 2. 発表標題 共通論題コメント日独比較の視点で ナチス・ドイツ期鉄道輸送との対比で |
| 3. 学会等名 鉄道史学会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 ばん澤 歩 |
| 2. 発表標題 「1970年代までの東独（DDR）国鉄・ライヒスパーンの経営問題：西ベルリンSパーンの事例から」 |
| 3. 学会等名 鉄道経営史研究会（代表 中村尚史東京大学教授） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 ばん澤 歩 |
| 2. 発表標題 武田晴人『日本経済史』（有斐閣、2019）をめぐって：外国経済史の立場から |
| 3. 学会等名 立教大学経済学会「武田晴人『日本経済史』（有斐閣、2019）をめぐって」 |
| 4. 発表年 2021年 |

〔図書〕 計6件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 日本経済史研究所 | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 思文閣出版 | 5. 総ページ数 997 |
| 3. 書名 歴史からみた経済と社会 : 日本経済史研究所開所90周年記念論文集 | |

| | |
|-------------------|-----------------|
| 1. 著者名 ばん澤歩 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 NHK出版新書 | 5. 総ページ数 302 |
| 3. 書名 ナチスと鉄道 | |

| | |
|---------------------|-----------------|
| 1. 著者名 佐々木聡編 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 新世社 | 5. 総ページ数 329 |
| 3. 書名 グラフィック 経営史 | |

| | |
|--------------------|-----------------|
| 1. 著者名 社会経済史学会編 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 丸善出版 | 5. 総ページ数 729 |
| 3. 書名 社会経済史学事典 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 ばん澤 歩 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 中央公論新社 | 5. 総ページ数 304 |
| 3. 書名 鉄道のドイツ史：帝国の形成からナチス時代、そして東西統一へ | |

| | |
|---------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 ばん澤 歩 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 N T T 出版 | 5. 総ページ数 240 |
| 3. 書名 ふたつのドイツ国鉄：東西分断と長い戦後の物語 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|